

(様式第13号)

## 学 位 論 文 要 旨

氏名: 葉畑恭介

題目: 中国西部農村における就業移動とその影響に関する研究  
( Effects of Employment Shift on Farm Villages in Western China )

中国では改革開放以降、農村に停滞していた余剰労働力を都市・工業部門が豊富で安価な労働力とすることで、急激な経済成長をとげた。農村戸籍を有しつつ非農業に従事する彼らは農民工と呼ばれる。その供給側である農村では、人口圧力の低下と農外部門からの収入によって貧困問題が緩和した。

本研究は、中国の農村に所属する人々の就業構造がどのように変化し、就業移動による農業、農村における住民活動、およびそれらの担い手がどのような影響をうけたのか、農村調査から考察した。調査地は農外就業が普及して間もない中国西部地域から、出稼ぎ労働力供給地である山村、都市近郊の通勤兼業地帯である農村という条件の異なる2地域を選定し、農村住民に対する聞き取り及びアンケート調査を行った。

第1章では、中国における経済成長過程と就業移動の変遷を概観した上で、中国の就業移動に関係する特徴的な戸籍制度、土地制度、および退耕還林政策の変遷をまとめた。加えて就業移動に関係する文化的背景を整理した。また中国の就業移動との農村の変容に関する先行研究のレビューを行った。

第2章では、条件不利地域である寧夏回族自治区の南部山区を対象に、《中国寧夏南部山区生態建設と経済社会発展実証研究》課題組によって2000年から2002年にかけて同一農家を対象に行なった農家経済調査のパネルデータを使用し、農外就業の普及段階の所得、就業構造の変化とその要因を考察した。結果、農外就業を行う者は増加しつつも、産業間の転出入が激しく、就業が不安定なものであることがうかがえた。また、所得・就業相互の関係、また地域特性、学歴や所有資産、初期所得といった初期条件の違いによる農外就業への影響が確認された一方、本地域で就業移動のプッシュ要因となったと考えていた退耕還林(草)に関しては、退耕の実施の有無による明確な就業状況の違いはなかった。

第3章では、条件不利地域のより詳細な就業状況と農村活動や農業への関わりを確認するために、第1章と同じく寧夏回族自治区の南部山区に位置する固原市彭陽県から自然・社会条件がことなる3村を選定し、就業者個人に対するアンケート調査並びに村長ら村の顔役からのヒアリングを行った。結果、条件不利な地域の方が住民活動の活発性の低下が見られた。また好条件地では、手間替えや無償で行われてきた共同作業が、経済的なインセンティブを付加することによって維持されていた。農業に関しては在村者のほとんどが参加しており、出稼ぎ能力が高いと想定される者ほど積極的な農業を行っていると考えられる結果となっ

た。ただし10代から20代の男性在村者は極めて少なく、今後農村・農業の担い手が安定的に確保されるのか懸念される状況にあった。

第4章では、通勤型就業が多い寧夏回族自治区吳忠市の都市近郊の農村において、在村者に対する聞き取りから、改革開放以降の農外就業の変遷を確認し、世帯における農外就業と農業の位置づけと今後の就業の展開可能性を検討した。結果、多くの農外就業は臨時的就業に過ぎず、就業経験などによる安定性や収入の上昇もみられない。また収入のほとんどを農外就業から得つつもその不安定性から、農業には生活保障としての役割が求められている。一方、順調な農外就業は農畜産業の収入増加にも貢献していることが明らかになった。

第5章では、就業移動による影響を受け、かつそれ自体も就業や移住に対する意識に影響を与えると考えられる住民活動を取り上げた。出稼ぎ労働力供給地である彭陽県、通勤兼業地域である吳忠市周縁及び永寧県を対象に、就業移動の影響とそれに対する住民の対応をまとめた。そこでは農外就業の普及に従って、伝統的規範から経済的なものへと行動様式が変容し、伝統的に無償で行われていた活動の幾つかは、新たに経済的な仕組みを導入することにより維持されていた。また従来からある助け合い活動などを村政府が新たに制度化し、普及をうながすなどの対応が成されていた。

これらの結果を受け、終章では、中国西部農村の就業移動とその農村・農業への影響を、出稼ぎ労働力供給農村と都市近郊の農村との比較を行いつつ改めて整理したうえで、今後の農村・農業の発展を円滑に進めるためには、現在の農業・農村に滞留している質の低い労働者の新たな農業の中でもその役割を創出すること、また比較的質の高い労働者も制度的要因や就業の不安定さから農村に縛られざるを得ない現段階のうちに農業や農村での住民活動でも活躍の場を与えることの必要性を指摘した。